ピーター・F・ドラッカー＆上田惇生文庫　図書目録及び解説

※「年」については、ピーター・F・ドラッカー氏が著作した年となり、著作した順に掲載しております。

※年	題名	概要
1939	『「経済人」の終わり』 ドラッカー名著集⑨ The End of Economic Man	第一次大戦後、民主主義が根づいていなかった国では、ブルジョア資本主義とマルクス社会主義に失望した大衆がファシズム全体主義にはしった。経済のために生き、経済のために死ぬという経済至上主義からの脱却を説く本書は、実に 70 年を経た今日、われわれの問題意識と同じである。後の大英帝国宰相ウィンストン・チャーチルの激賞を得た。ドラッカー29 歳のときの処女作であって、ナチズムの日常と本質を描いて息をつかせない。
1942	『産業人の未来』 ドラッカー名著集⑩ The Future of Industrial Man	社会が機能するには、一人ひとりの人間に「位置」と「役割」があって、かつそこに存在する権力に「正統性」がなければならない。しかも、よりよい社会への改革の道は、現実に立脚した正統保守主義の原理によらざるをえない。ソクラテスからフランス啓蒙思想、ルソー、ロベスピエール、社会主義、マルクス、ヒトラーとつづく進歩主義、全体主義の系譜の破綻を明らかにするとともに、イギリスとアメリカの正統保守主義の実績をこれに対比させる。社会にかかわる一般理論を確立し、その産業社会への適用を特殊理論として展開したドラッカー社会学の原点である。
1946	『企業とは何か』 ドラッカー名著集⑪ Concept of the Corporation	世界最大最強のメーカーＧＭに招かれて同社を１年半にわたって調査したドラッカーがまとめた本書が、世界中の企業、政府機関、ＮＰＯの組織と経営を変えた。フォードの再建の教科書となり、ＧＥの組織再編の教科書となった。人類社会にとってのマネジメントは本書から始まった。今日の事業部制も本書がいちはやく唱えたものである。
1954	『現代の経営（上）（下）』 ドラッカー名著集②③ The Practice of Management	企業の機能はマーケティングとイノベーションである。経営の本質を明示することによって、世界中の企業と経済に直接の影響を与えた。『企業とは何か』発表の後、ドラッカーは、産業社会の担い手たる企業とその経営の成否が社会の行方を左右するとの認識のもとに、マネジメントを深化集大成し、本書によってマネジメントの父とあおがれるようになった。ドラッカー経営学の原典である。
1964	『創造する経営者』 ドラッカー名著集⑥ Managing for Results	マネジメントの師たちの師とよばれるに至ったドラッカーは、世界の企業、政府機関、ＮＰＯの相談相手となった。その豊富な経験をもとに、事業とは何かを明らかにした世界最初の、かつ今日にいたるも最高の経営戦略書である。
1966	『経営者の条件』 ドラッカー名著集① The Effective Executives	成果をあげることは学ぶことができる。かつて社会のパワーセンターは、国王をはじめとする少数支配者だった。今日では、組織とともに働く一人ひとりの人間である。全員がトップのように働かなければ、組織の成功、社会の繁栄はない。プラトンからマキアベリにいたる賢人たちが時の支配者に教えたように、ドラッカーは現代社会の担い手たるわれわれ普通の人間に教える。万人のための帝王学として今日も広く読まれている。
1969	『断絶の時代』 ドラッカー名著集⑦ The Age of Discontinuity	地震の群発のように、激動が先進社会を襲いはじめた。その原因は地殻変動としての断絶にある。この断絶の時代をグローバル化の時代、多元化の時代、知識の時代、起業家の時代ととらえた本書は、世界中で世紀のベストセラーとなった。今日まさにその渦中にある大転換期への突入の様相とその本質を明らかにしている。イギリスの首相マーガレット・サッチャーがドラッカーによるものとして推進し、やがて世界に広がった政府現業部門民営化の構想は本書で発表された。「現代社会最高の哲人」（ケネス・ボールディング）としての名声を不動にした名著である。
1973	『マネジメント－課題、責任、実践（上）（中）（下）』 ドラッカー名著集⑬⑭⑮ Management:Tasks,Responsibilities,Practices	われわれの社会は組織社会として極度に多元化した社会となった。経済的な財とサービスの提供、医療、福祉、教育、知識の探求から環境の保護まで、主な社会的課題のほとんどすべてが専門の社会的機関にゆだねられた。それらの課題をいかに果たすかがマネジメントの課題である。 原著 800 頁を超える本書は、今日も大学、ビジネススクール、経営セミナーの教科書としてつかわれている。「マネジメントを発明した男」（ジョン・タラント）の筆によるマネジメントの集大成である。
2001	『マネジメント［エッセンシャル版－基本と原則］』 Management, Essential Version	ドラッカーの指導のもとに『マネジメント－課題、責任、実践』を英文のまま要約して翻訳したものが『抄訳マネジメント』（1975）であり、これに最新のマネジメント論を加え改訳したものが、小説『もし高校野球の女子マネージャーがドラッカーの「マネジメント」を読んだら』（2009）の主人公が参考にしたとされる本書である。
1976	『見えざる革命』 The Unseen Revolution	ドラッカーは予測しない。すでに起ったことの帰結を予告するだけである。50 歳人口は 20 年後には 70 歳人口となる。高齢者の健康や住居しか論じられていなかったとき、まさに突然、ドラッカーが人口構造の激変の様相とその帰結について論じた。高齢化社会にかかわる必読の書である。社会の高齢化にともなう経済、社会、政治の変貌を描いて本書の右に出るものはまだない。

年	題名	概要
1978	『傍観者の時代』 ドラッカー名著集⑫ Adventures of a Bystander	第 1 次世界大戦、大恐慌、第 2 次世界大戦と続いた 20 世紀前半における出会いと時代を描き、ドラッカーはどのようにつくられたかを知る上で必読である。糸井重里さんをして「お会いしてみたかったなぁ」と言わしめたドラッカー通の秘蔵書である。さすが少年のころ作家志望だったというだけの名文である。
1980	『乱気流時代の経営』 Managing in Turbulent Times	「乱気流の時代にあっては、マネジメントにとって最大の責任は、自らの組織の生存を確実にすることである。組織の構造を健全かつ堅固にし、打撃に耐えられるようにすることである。急激な変化に適応し機会を捉えることである」の一文に始まる本書は、もう少し丁寧に読んでおけば、その後の苦境にあれほどまで悩まされることもなかったであろうと思わせるものである。
1981	『日本 成功の代償』 Toward the Next Economics and Other Essays	経済学、環境問題、技術、多国籍企業、行政改革、科学的管理法、取締役会、定年制等、今日の先進国社会が直面する多様な問題を取り上げている。しかも、書名に反映されているように、日本を取り上げた論文が三本ある。本書序文においてドラッカーは、「全ての文明の中で、日本だけは目よりも心で接することによって理解することのできる国である」と言っている。
1982	『変貌する経営者の世界』 The Changing World of the Executives	1976 年から 81 年にかけて『ウォールストリート・ジャーナル』に書いたものを中心とした論文集。組織とその直面する諸問題を論じている。
1985	『イノベーションと企業家精神』 ドラッカー名著集⑤ Innovation and Entrepreneurship	イノベーションが天才のひらめきや天賦の才ではなく、誰でも学び実行することのできるものであることを明らかにした世界最初の方法論である。企業家精神のマネジメントについての嚆矢の書であって、かつ今日に至るも唯一といってよい定本である。既存の企業、公的機関、ベンチャーそれぞれにおけるイノベーションと企業家精神を説いている。
1986	『マネジメント・フロンティア』 The Frontiers of Management	明日の世界は、政治家、官僚、学者ではなく、組織に働く普通の人たちによって開拓されると説く本書は、『ウォールストリート・ジャーナル』『フォリン・アフェアーズ』『フォーブズ』『ハーバード・ビジネス・レビュー』収載の 37 本の論文よりなる。「変化が機会である」が本書のテーマである。本書冒頭の「変貌した世界経済」(『フォリン・アフェアーズ』初出）は、その年世界でもっとも読まれた経済論文となった。
1989	『新しい現実』 The New Realities	歴史には、ひとたび越えてしまえば、経済的、社会的、政治的な景色が一変するという境界がある。1965 年から 73 年の間のどこかで世界がそのような境界を越え、新しい次の世紀に入ったことを宣言した著作である。ソ連邦の崩壊、東西冷戦の終結、テロリズムの危険を予告したことでも有名。
1990	『非営利組織の経営』 ドラッカー名著集④ Managing the Non-Profit Organization	非営利組織の役割の増大を予告し、そのマネジメントのあり方を明らかにした本書は、非営利組織関係者のバイブル、座右の書である。非営利組織発展の鍵を「ここでは自分が何をしているかがわかる。私は貢献している。コミュニティの一員になっている」とのボランティアの声にみている。ドラッカー名言の宝庫でもある。
1992	『未来企業』 Managing for the Future	本書は、『ウォールストリート・ジャーナル』『エコノミスト』『ハーバード・ビジネス・レビュー』『ニューヨーク・タイムズ』など世界一流の紙誌に収載の論文集である。いずれも組織があげるべき成果に焦点を合わせている。１９９２年、経団連が中国の有力大学付属の日本研究所に日本語文献をまとめて贈呈すべく、会員の経済人にサイン入り本の寄贈を依頼したところ、もっとも多く寄せられたものが本書だった。
1992	『すでに起った未来－変化を読む眼』 The Ecological Vision	「利益の幻想」「シュンペーターとケインズ」「企業倫理とは何か」「日本画に見る日本」「もう一人のキルケゴール」など、40 年を越える執筆活動からドラッカー自身が選んだ珠玉の論文集。本書においてドラッカーは、自らを『ファウスト』（ゲーテ）の望楼守に擬し、社会生態学者「見るために生まれ、物見の役を仰せつけられ」（髙橋義孝訳）し者と規定した。
1993	『ポスト資本主義社会』 ドラッカー名著集⑧ Post-Capitalist Society	歴史は数百年に一度際立った転換をする。境界を越える。そのとき社会は数十年をかけて次の新しい時代の用意をする。世界観を変え、価値観を変える。社会構造、政治構造、制度、技能、芸術、機関を変える。やがて 50 年後にはまったく新しい世界が生まれる。2020 年、30 年まで続くであろう今次の転換期を描いた必読の書である。
1995	『未来への決断』 Managing in a Time of Great Change	『ウォールストリート・ジャーナル』『ハーバード・ビジネス・レビュー』『フォリン・アフェアーズ』収載の論文 26 本からなる本書は、マネジメントの指針となり、道具となるべきものである。考えるヒントとなり、行動のきっかけとなるものである。本書収載の「事業の定義」は、順風満帆の企業がなぜ突然挫折するかを明らかにしている。
1995	『挑戦の時』『創生の時』 Drucker on Asia	阪神大震災と地下鉄サリン事件をはさむ 1994 年 9 月から翌 95 年 3 月にかけてのドラッカーと中内功との対話をまとめた往復書簡集である。有名なドラッカー青年時の七つの経験が開陳されたのは、この書簡集においてだった。